



田部井 世志子 教授

## 田部井 世志子 教授

### 略歴

1956年11月29日 福井県小浜市生まれ  
1980年3月 京都教育大学英文科卒業  
1982年3月 お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程英文学専攻修了  
1984年3月 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程比較文化学専攻中途退学  
1984年4月～1986年8月 福井大学教育学部英語科講師  
1986年9月～1989年3月 福井大学教育学部助教授  
1989年4月～1993年3月 北九州大学文学部英文学科助教授  
1993年4月～1996年3月 北九州大学文学部比較文化学科助教授  
1993年7月～1994年7月 Stanford University (U.S.A) 客員教授  
1996年4月～北九州大学文学部比較文化学科教授 (2001年4月より北九州市立大学に名称変更)  
1997年7月～1998年3月 北九州大学文学部英文学科主任  
1999年1月～1999年12月 北九州大学文学部比較文化学科主任  
2000年1月～2001年12月 北九州(市立)大学評議員  
2009年4月～2013年3月 学生部長(サポート委員長)  
2014年10月～2015年3月 国際教育交流センター長  
2017年4月～2019年3月 文学部長、大学院専攻長  
2021年4月～2022年3月 学長補佐(ダイバーシティ推進ワーキング・グループ委員長)  
2022年3月 北九州市立大学退職

### 学外活動

1992年8月～1993年3月、1994年1月～1999年3月 JICA(国際協力事業団)の委託による技術協力促進コース ブリーフィング講師  
1997年7月～1998年3月 ジェンダー研究北九州市実行委員会委員  
2013年5月～2014年5月、2015年5月～2016年5月 公立大学協会 公立大学学生ネットワーク支援に関する作業部会委員  
2016年5月～2017年5月 公立大学の学生交流に関するワーキンググループ委員(主査)  
2017年12月～2021年12月 九州大学出版会評議員  
2019年2月～ 東アジア文化都市2020北九州 実行委員会委員 (→東アジア文化都市2020-2021北九州)

## 学会活動等

日本 D.H. ロレンス協会（副会長、会長）、日本英文学会会員、大学女性協会会員（JAUW； Japanese Association of University Women）、D.H. ロレンス研究会会員

## 主な研究業績等

（論文）

「馬ではなく、蛇が…… — 「セント・モア」におけるキー・イメージ」（『ロレンスの短編を読む』、単著、D.H. ロレンス研究会編、松柏社、2016 年）

「生命の輪」への参入 — 蛇の表象を手掛かりに」（『ロレンスへの旅』、単著、D.H. ロレンス研究会編、松柏社、2012 年）

「旅人の表象としての蠅と蛇 — アメリカ旅行記における『深みの想像力』」（『ロレンス研究 — 「旅と異郷」』）（単著、朝日出版社、2010 年、『ロレンス研究』シリーズ他 7 冊）

“An Ecological Interpretation of “The Man Who Loved Islands”” (*D.H.Lawrence: Literature, History, Culture*) (Eds. Michael Bell, Keith Cushman, Takeo Iida, Hiro Tateishi, Kokusho-KankoKai Press, 2005)

「『母と娘』(by D.H.Lawrence) における『娘のアイデンティティ』追求」（『言語文化叢書 XV — 言語と文化のジェンダー』、単著、九州大学大学院言語文化研究院、2005 年）

「蘇る D・H・ロレンス — 森を愛した男」（『文学における《愛の位相》 — 想像力の磁場に』、単著、東京教学社、2004 年）

「《ロレンスとバシュラール》〈物質的想像力〉を駆使した『プロシア士官』の読み」（『D.H. ロレンスと新理論』、単著、国書刊行会、1999 年）他、大学関係紀要等

（翻訳）

『D.H. ロレンス書簡集 I ～ IX』（共訳、うち III 巻については編訳、松柏社、2005 年～2019 年）

『ユーカリ林の少年』by D.H. ロレンス、M.L. スキナー（共訳、彩流社、2015 年）

『D・H・ロレンス全詩集 完全版』（共訳、彩流社、2011 年）

『暴虐と忘却 — 1945 年以降の政治小説』by Robert Boyers（共訳、法政大学出版局、叢書・ユニベルシタス 567、1997 年）

『不死鳥 II』by D.H.Lawrence（共訳、山口書店、1992 年）他

（その他、辞典の項目担当、書評、英語のテキスト等々）

『学生サポート大作戦 — 寄りそう学生支援』シリーズ 北九大の挑戦 1、（編著、九州大学出版会、2014 年）他



## D・H・ロレンスへの誘い<sup>いざな</sup>

—— 愛が不毛な悲劇的時代における「へそ曲がりな」ロレンスの現代的意義 ——

田部井 世志子

### 概要

生きるとは、愛するとはどういうことなのかを追究した D・H・ロレンスが死を前に達した結論は、人間は愛し合えないという悲観的なものだった。その原因を彼は多方面に求めているが、本稿ではとりわけ現代社会において重要視されているもの——「金銭、物質」、「知性、知識」、「機械」——に焦点を当て、ロレンスの言葉に沿ってそれらの問題点を明らかにした。「へそ曲がり」と言われそうなロレンスであるが、彼の主張には一理あるのではないだろうか。

「絶望」という言葉はロレンスの辞書にはない。今後我々は、想像力をたくましくし、「優しさの勇氣」を持ってお互いに「触れ合いの文明」を築く努力をすることで、希望は見出せるとロレンスは主張する。そのためにも、まずは「太陽と共に始めよ」という彼のメッセージは、現代に生きる我々にとっても重要なものであり、それは未来に繋がると言えるだろう。

### はじめに

紀要に掲載できる最後の機会として、今回はこれまで研究を続けてきたイギリスの小説家、詩人、随筆家、劇作家……と様々な側面を持ち、多様で膨大な量の作品を世に送り出した D・H・ロレンスの現代的意義を改めて問うてみたい。筆者は、これまでロレンス研究を続ける中で、興味深いロレンスの言葉の数々に遭遇してきた。それらを将来『ロレンス語録』としてまとめられればと考えているが、今回はそれら数々の言葉の中から、一部を紹介することで、ロレンスの興味深さ、重要さを読者諸氏と共有できればと思う。

思いの発端は 2015 年 6 月に文部科学省が通知した国立大学の人文社会系の縮小方針にある。人文社会系の学問は役に立たない、とりわけ文学部、更にはその学部の学問分野の中でも特に文学は役に立たないから、この社会には必要なし、と公言されたも同然の出来事だった。その後、人文系や教育系の大学関係者ばかりでなく、幅広い層から反発や疑問の声が続き、『文學界』も異例の特集「『文学部不要論』を論破する」を組んだことは記憶に新しい。後に文科省は、廃止という言葉は教職免許状の取得を卒業要件としない「ゼロ免課程」にかかるものであり、人文社会系学部を廃止するつもりはないと釈明したが、通知の撤回は行っていない。

文科省の方針に対して様々な反論がある中で、筆者自身、以来、文学部（文学）は、更にロレン

スは果たして本当に役に立たないのかという問題を自らに問いかけ、その反論を自分なりに考え続けてきた<sup>1</sup>。学問を閉じられた空間のみで行う単なる「机上の空論」で終わらせることなく、時にはその閉じられた空間から解放し、一人でも多くの人にその学問、研究の重要性を発信していくことの必要性を痛感している。そこで本稿では、先に取り上げた問いかけの中でも、とりわけ後者の問い——ロレンスの意義——に焦点を当て、ロレンスが様々なジャンルの作品群の中で発している多くの興味深い言葉やメッセージの中から一部であるが紹介することで、彼の現代的意義を改めて問うてみたい。

## I. D・H・ロレンスの悲観主義的時代観——愛の不毛性

ロレンスが生を受けた1885年から1930年という期間はどのような時代だったのだろうか。イギリスは16世紀頃から強国スペイン、フランスとの闘いに勝利し、世界各地に勢力を伸ばし、各地に植民地を作り、巨万の富を築く超大国「大英帝国」として君臨していた。ロレンスが生まれた1885年は、その最盛期のヴィクトリア女王時代(1837-1901)の後期にあたる。帝国には陰りが見え始めたが、まだ余勢のある時代だったと言えるだろう。

また、イギリスを「世界の工場」にしたのは18世紀後半から始まった産業革命であるが、それがために、裕福な産業資本家と貧しい工場労働者との対立関係ができ、格差の問題が大きくなっていった。ロレンスが生きた時代は、そのため労働者たちの権利を求める運動が激化した時代でもあった。

政治参画に関して言えば、参政権の問題についても大きく動いた時代だった。1832年、最初の選挙法改正によって男性の庶民が国政に参加できるようになると、財産がない労働者は選挙権を要求して激しい運動を展開し、その結果、1918年には成人男子すべてに選挙権が与えられた。女性についても、19世紀の後半から男性と平等の選挙権を求めて運動が開始され、最終的に1928年には成人女子すべてに選挙権が与えられた。

教育面では1870年には初等教育の義務化がなされ、ロレンス自身、炭鉱夫の息子として生まれたが、労働者の地位の向上や教育の機会の増大などの恩恵を受けて、現在のノッティンガム大学で学ぶこともでき、一時は教師の仕事もしていた。

19世紀は科学・技術が大いに発達した時代であった。蒸気機関車をはじめ、数々の機械の発明がなされ、科学信仰、機械文明信仰が起り始めた。人々の生活はより快適になり、物質的に生活が豊かになったと考えられる。また、1859年に出版されたダーウィンの『種の起源』の進化論に

<sup>1</sup> 文学批評の一つであるエコロジー批評も、文学の有用性を取立てて訴えるためにスタートした。他にも、老子や荘子の「無用の用」論を用いて論破する方法、あるいは、そもそも実用主義自体を問い直す方法等、様々ある。

より、それまで聖書に述べられていた神による天地創造説が揺らぎ始め、またフロイト（1856-1939）の精神分析学の創始や、彼の性の理論がヴィクトリア朝の精神風土に大きく揺さぶりをかけたことを無視してはならないだろう。そして忘れてはならないのは、多くの国々を巻き込み、社会に大きな傷跡を残した戦争、とりわけ第一次世界大戦（1914-1918）である。

ロレンスはこのように変化に富む激動の時代を生き、その流れに敏感に反応しながら作品を生み出していった。では、ロレンスは自身が生きた時代をどのような時代だと捉えていたのだろうか。ロレンスといえば『チャタレー卿夫人の恋人』（*Lady Chatterley's Lover*、以下『チャタレー』あるいは *Chatterley* と略す）というくらい、彼の名を世に知らしめた作品、彼の最晩年の作でもある本作品にまず目を向けてみよう。その導入部分である有名なフレーズに彼の達した時代認識が吐露されている。

Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically. The cataclysm has happened, we are among the ruins, we start to build up new little habitats, to have new little hopes. It is rather hard work: there is now no smooth road into the future: but we go round, or scramble over the obstacles. We've got to live, no matter how many skies have fallen. (5)

このように、「我々の時代は本質的に悲劇的時代である」とする悲観論的な時代認識と、困難を承知の上で「いかなる災害が起こったにせよ、我々は生きなければならない」と言うロレンスの並々ならぬ覚悟が表明されている。

因みに現代社会に思いを巡らしてみよう。現代社会は果たして悲劇的なのだろうか。ロレンスの「大変動」（“cataclysm”）を文字通り、例えば大洪水などの天変地異と受け取れば、近年、地球上では実際に各地で大災害が何度も起こり、ロレンスがまさに書いている通りの悲劇的な状況の中で我々人間は生きることを余儀なくされている。自然災害なのか人災なのかは意見は分かれるものの、このコロナ禍もまた同様の災害と言えるだろう。同時に「大変動」を、とりわけ社会的・政治的な激動、大変動と捉えれば、やはりこちらの側面でも実際に様々なことが世界中で起こっており、あるいはその兆候がうかがえる。それらが多かれ少なかれ悲劇を生み出しているという点では、ロレンスの時代認識は現代社会にも当てはまるだろう。

天変地異や社会的、政治的大変動が自分の周りに起こっていないから、自分の場合は当てはまらないと考えることも可能かもしれない。しかし、実はロレンスはリアルな意味での天変地異や社会の大変動といったものだけではなく、人間存在の在り方をも問題視しており、それを悲劇的だと捉えているのである。では、ロレンスは人間存在の在り方の一体何を悲劇的だと捉えているのだろうか。次に取り上げるのは『チャタレー』と同時期に書かれた随筆『アポカリプス（黙示録）』（*Apocalypse*）

からの抜粋である。

So that we see, what our age has proved to its astonishment and dismay, that the individual cannot love. The individual cannot love: let that be an axiom. And the modern man or woman cannot conceive of himself, herself, save as an individual.... The Christian dare not love: for love kills that which is Christian, democratic, and modern, the individual. The individual cannot love. When the individual loves, he ceases to be purely individual. And so he must recover himself, and cease to love. It is one of the most amazing lessons of our day: that the individual, the Christian, the democrat cannot love. (147-48, underline mine)

「個人は愛することができない。」ロレンスは現代における個人の愛の不毛性の問題をこのように投げかけ、この世を去った。ロレンスが提示した現代人に対する警告の中でも最も衝撃的で、また重要なメッセージだと言える。人間であれば誰でも愛し合えるという楽観的恋愛観、人間観を根本的に覆えしてしまうメッセージである。男女関係を中心として、男同士、女同士の関係も含めた人間関係全般における愛のテーマを扱った作品が圧倒的に多いことを考えても、ロレンスの創作意欲を最も駆り立てたのは、この愛の問題であったと言っても過言ではないだろう。このような問題追究をした作家ロレンスが『虹』(*The Rainbow*)をはじめ、様々な作品を世に出し、最後に辿り着いた結論が既に見てきた通り、「個人は愛することができない」というものであったからには、我々読者はその結語をどれほど厳しいものであっても真摯に受け止める必要があるのではないだろうか。

『アポカリプス』と同時期に書かれた『チャタレー』を出版するにあたってロレンスは「『チャタレー卿夫人の恋人』について」(“A Propos of ‘Lady Chatterley’s Lover’” 以下“A Propos”と略す) <sup>したた</sup>を認め、その中で、人間の絆の欠如からくる孤独の問題に言及している。

The sense of isolation, followed by the sense of menace and of fear, is bound to arise as the feeling of oneness and community with our fellow-man declines, and the feeling of individualism and personality, which is existence in isolation, increases. The so-called “cultured” classes are the first to develop “personality” and individualism, and the first to fall into this state of unconscious menace and fear. The working-classes retain the old blood-warmth of oneness and togetherness some decades longer. Then they lose it too [...]. (332)

同胞との一体感が欠如するにつれて、孤独感が募らざるを得ないと言う。とりわけ「個性」や「個



人主義」を発展させてきた教養ある階級の人々こそが、まずこの状況に陥ってしまうという興味深い指摘もしている。

ここで目を今日の日本に向けてみよう。新聞やテレビの報道を見聞きするにつけ、様々な人間の不幸が取り沙汰されている。しかもその中で特に目を引くのは、人と人の関係性の希薄化、お互いに意思疎通をとることの困難さ、愛情の欠如といった、人間関係の不毛性や孤独が原因の不幸であり、その数の多さに驚かされる。一つには、以前はニュースとして話題にならなかったようなものまでもがネットワークの広がりの中で全国津々浦々にまで流れるようになったことから、また一つには、メディアの情報操作の可能性、すなわち、面白おかしく、視聴率を上げるための作弄的な情報操作の可能性も考えられることから、世の中は愛の不毛性ゆえの事件で満ち溢れているといった極端な印象を与えてしまっている可能性も否めない。しかし、それを踏まえた上でも、昨今の社会状況の変化の中で、人間関係が危うく不安定になってきていることを示す事件が確実に一定数起こっているという事実を見逃してはならないだろう。

このようにロレンスの悲劇的な時代認識は現代日本社会にも通じるものがあるだろう。どうしてこのような状況になってしまったのだろうか。この先日本人は、人類はどのような方向に向かおうとしているのだろうか。そもそも現代人に孤独からの脱出、そして人間関係回復の希望はあるのだろうか。以下、ロレンスの更なるメッセージに耳を傾けることにしよう。

## II. なぜ、愛し合えないのか？

人間同士が愛し合えないのはなぜなのだろうか。もちろん「愛」の定義にもよるが、実際に愛し合っているカップル、人間同士がいるのではないかという反論もあり得るだろう。実際ロレンスも、すべての人間が愛し合えないと断言しているわけではなく、愛し合うことが困難になりつつあるという経過を現実問題として突きつけているのである。

では具体的に何が人間同士の愛を困難にしているのだろうか。先に取り上げた『アポカリプス』の引用の前後でロレンスが触れているのは、個人主義者、キリスト教信者、民主主義者の問題である。どのカテゴリーの人々もロレンスによると愛し合うのが困難であるというわけである。いずれも多くの人々に受け入れられているからには、主義や精神としては素晴らしいものであろう。にもかかわらず、個人というものにこだわり過ぎるがゆえに、逆に利己主義に陥ったり、またそれらが人間本来の<sup>さが</sup>性に反する側面があったりするために、究極のところ孤独に陥ったり、愛し合えないという状況になりかねないとロレンスは主張している<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> この議論の詳細については、ロレンスの『アポカリプス』が詳しいので参照のこと。

愛し合えない悲劇的な時代だとロレンスが考える理由については他にも多々ある。『チャタレー』の中でも、ある時は重要な登場人物であるメラーズやコニーの言葉を借り、またある時は語り手の視点で語られている。既述の理由以外にも、例えば、拝金主義<sup>3</sup>や「成功の牝犬神」(“the bitch-goddess of Success” 21)への身売り、知性偏重主義や精神主義<sup>4</sup>、それらに根ざした教育等<sup>5</sup>による人間の内部の空洞化や荒廃、そして何よりも産業主義、機械文明<sup>6</sup>、あるいはそれらによる生の抽象化といった様々な問題をその理由として提示している。既に見てきた通り、機械文明の発達のお陰で、経済的、物質的な豊かさが一定程度、現実のものとなり、教育の普及による知識や知性の充実も促進されつつあった当時のイギリスにあって、これらが多かれ少なかれ人間同士の愛の不毛性、あるいは人間存在の孤独な閉塞状態という悲劇的な状況をもたらしていると訴えているのである。様々な理由が考えられる中、本稿では「拝金主義」(物質主義)、「知性偏重主義」、そして「機械主義」(機械文明)の3つの項目に焦点を当ててみよう。

## II-1. 拝金主義、物質主義の問題

現代人のおそらく誰もが大事だと考える金銭であるが、その金銭と愛の不毛性とはどのように関連しているのだろうか。まず、『チャタレー』の中でコニーと、彼女にとって救い主ともいうべき森番メラーズとの会話の中で、メラーズが自分の「存在の核心」について説明をする場面を見ておこう。

“I [Mellors] tell you, it’s invisible. I don’t believe in the world, nor in money, nor in advancement, nor in the future of our civilization.—If there’s got to be a future for humanity, there’ll have to be a very big change from what now is.” (277)

このようにメラーズは未来に対する不信感を抱いているわけだが、それは彼が「金銭」、「進歩」、「世界」、「文明の未来」を良いものであるとは考えられないからである。多くの人が良しとするものに対してこのように否を唱えるメラーズであり、目には見えないもの、世の中が価値を置かないものこそが自分の「存在の核心」なのだと言語している。ここでは彼が信じられないと語るものの中の、特に「金銭」の問題について考えてみよう。以下に「金銭」や拝金主義の問題を提起するロレンスの言葉を「トマス・ハーディ研究」(“Study of Thomas Hardy”)から引用してみよう。

<sup>3</sup> 62、105、142、219、254、261、276、299、300 参照。

<sup>4</sup> 37、50、71 参照。

<sup>5</sup> 183 参照。

<sup>6</sup> 105、119、120、217、220、281 参照。

Have I not a normal money appetite, as I have a normal appetite for food? [...] Then why should I want a thousand pounds, when ten are enough? “Thy eyes are bigger than thy belly,” says the mother of the child who takes more than he can eat.[...]

[...] Riches would be the means of freedom if there were no poor, if there were equal riches everywhere. Till then, riches and poverty alike are bonds and prisons, for every man must live in the ring of his own defences, to defend his property. And this ring is the surest of prisons. (427-28)

食品に対する欲（食欲）は普通、正常に働くにもかかわらず（もちろん一種の体調不良等ゆえに働かなくなることもなくはないが）、金銭については欲に限りがないと言う。加えて、貧困であることだけでなく、裕福であることもまた、牢獄にいるようなものだとロレンスは訴えている。経済的な窮地に陥り、貧困に喘ぐようになると、日々金銭のことばかり考えざるを得なくなり、心はそれに囚われてしまう。同時にロレンスは裕福であっても同様のことが言えると主張する。金銭にゆとりがあっても、今、持っている以上に所有したくなる。そういう不思議な魔力を金銭は持っているのである。このような状態ではやはり金銭に囚われているわけで、自由とは呼べないと分析する。そして彼は、富が自由の手段になるのは、貧困というものがなくなり、すべての人が平等に金銭を所有するようになった時だけだとまとめている。

また、金銭は生きるための単なる手段に過ぎないにもかかわらず、知らないうちにそれを貯めること自体が人生の目的になってしまうこともある、とロレンスは警告を鳴らしている。「生きる」とはどういうことなのかというテーマと絡めたロレンスの言葉を引用してみよう。

We must eat to live. And living is not simply not-dying. It is the only real thing, it is the aim and end of all life. Work is only a means to subsistence. The work done, the living earned, how then to go on to enjoy it, to fulfil it, that is the question. How shall a man live? What do we mean by living? (“Study of Thomas Hardy” 428)

仕事<sup>7</sup>は、金銭は生計を立てるための単なる手段に過ぎず、大事なのは仕事をして金銭を得た後、いかに人生を楽しみ、充実させるかであるにもかかわらず、どうしても働いて金銭を稼ぐこと自体が人生の目的のようになってしまいがちであるとロレンスは言う。まさに今の経済優先である日本社会の問題点をも言い当てている。

金銭に限らず、所有できるすべての物、物質に関しても同様のことが言えるだろう。飽くなき所

---

<sup>7</sup> 仕事によっては、それ自体が人生の生きる目的になるようなものもあるだろうが、ここでロレンスが取り上げている「仕事」は、金銭を儲けるための手段としての仕事のことである。

有欲に翻弄されがちな物質主義の問題である。人間は蓄積することを覚えてからは、所有欲というものに束縛され、翻弄されるようになってきたのだ。所有しているものの量が目に見え、数値化できる点、他の人と比較ができてしまう点も執着心を生んでしまう原因の一つかもしれない。「隣の芝生は青い」という表現もあるように、人は周囲の人と比較をしてしまいがちなのである<sup>8</sup>。

いずれにしても、金銭や物質は人間を「囚人」にし、人との不必要な競い合いを余儀なくさせるのである。ロレンスはB・ラッセルに宛てた手紙の中で、「物質的なものだけに囚われると[……]、競い合う必要のない人までもが[……]競い合って」生きざるを得なくなると書いている(*The Letters of D.H. Lawrence* 294)。他の人とは比較しようのないかけがえのない存在である個々の人間存在。それなのに、目に見える形の様々な社会の物差しで人間の存在価値が図られ、比較され、優劣が決められがちである。

このような状況にあっては、他と比較しようのないかけがえのない個人というものの存在意義が揺らぐことになる。競争が基本原則になってしまっているような社会において、生の横溢<sup>おういつ</sup>を謳歌する豊かな人生が送れるはずがなく、また、そのような社会において人間同士が良好な関係を育めるはずがないというわけである。以上、見てきた通り、何の問題もなさそうに見える金銭や物質について、ロレンスはその怖さや問題を伝えてくれている。

## II-2. 知性偏重主義、「知識」の問題

人間関係を良くするには、人と人が愛し合うためには、一体何が必要だろうか。当然のことながら、まずお互いに相手のことを良く知る必要があるだろう。ここで取り上げたいのは、その「知る」という行為の本来の在り方、そして知識の弊害の問題である。学校教育の恩恵を受けている我々にとって、知識が重要であることは暗黙の了解事項であるが、果たしてその知識に問題はないのだろうか。まずロレンスは、知識を得るための「知る」という行為には主に二通りの方法があると言う。

There are many ways of knowing, there are many sorts of knowledge. But the two great ways of knowing, for man, are knowing in terms of apartness, which is mental, rational, scientific, and knowing in terms of togetherness, which is religious and poetic. The Christian religion lost, in Protestantism finally, the togetherness with the universe, the togetherness of the body, the sex, the emotions, the passions, with the earth and sun and stars. ("A Propos" 512)

「分離化」によって知る「知的、合理的、科学的方法」と「一体化」によって知る「宗教的、詩的

<sup>8</sup> 香山リカ氏の著書の中に「比べずにはいられない症候群」というものがあつたり、近年、「隣の芝生は青い症候群」といった表現がネットでも散見されるようになっている。

な方法」の二通りである。後者は太古の昔から人間が対象を知るために用いてきた方法であり、事物に直接触れたり、その状態で夢想したりすることによって対象を知るという方法だった。ところが、人間が精神的、観念的、知的になるにつれて、今一つの方法、すなわち「分離化」によって、あるいは「知的、合理的、科学的」に知る方法が重要視されるようになってきたというわけである。

例えば、目の前に咲いている一輪の花を本当の意味で知るためにはどうすると良いのだろうか。さっそくその花を手折って持ち帰り、本棚から図鑑を取り出し、同じ姿のものを探し、花の名前を確認したり、あるいは理科の授業で経験をした人もいるかもしれないが、ピンセットを取り出し、花びらやガクなどを一枚ずつ丁寧に取り分け、机の上に並べ、どのような構造で成り立っているのかを確認したり……といった方法が考えられるだろう。これこそが今日の学校教育でも推奨されている分析的な方法なのである。しかし、ロレンスはこのような方法だけで本当にその花のことを知ったことになるのだろうかかと疑問を差し挟む。

彼は知的、理性的に知るという方法は、むしろ彼の最も重んじた生命力を萎えさせ、対象を切り刻むことになってしまいかねないと主張するのである。以下の「女性に変化するか?」(“Do Women Change?”)という随筆からの引用の中で、女性が一輪の雛菊の本質を見極めようとして分解していく中で、とうとうその生命を断ち、無に帰してしまう様子をロレンスは皮肉を込めて描写し、引き続き生命の何たるかに思いを馳せている。

They pick a daisy, and they say: There must be a point to this daisy, and I'm going to get at it.--So they start pulling off the white petals, till there are none left. Then they pull away the yellow bits of the centre, and come to a mere green part, still without having come to the point. Then in disgust they tear the green base of the flower across, and say: I call that a fool flower. It had no point to it!

Life is not a question of points, but a question of flow. (542)

ロレンスはこのように生命ある雛菊を分析的な方法で理解しようとするやり方を批判している。そのような行為はその生命を奪い、雛菊の生命の流れを台無しにしてしまうことに繋がるのであり、生命体としての存在を本当の意味で理解したことにはならないというわけである。では、雛菊のことを本来的に知るためにはどうすると良いのだろうか。花に近づき、手折ることなくじっくりと見つめたり、匂いをかいだり、実際に触れたりすることで、その存在を感じ取る……。むしろ五官を使ったこのような原始的なやりの方が、本来の生きた雛菊のことを感じ取り、知ることに繋がるとロレンスは主張している。

更にロレンスは「観念的な」知識についても同様のことを述べている。大自然の様々なものに対して頭脳を使った知的な知識を持てば持つほど、その本質を本当の意味では分かっていないにもか

かわらず、それをさぞかし知っているかのような錯覚に陥り、対象を侮ることになり、それらとの一体感を喪失してしまうことになると訴える。例えば空に浮かぶ月に思いを馳せてみよう。ロレンスは月について、「人生と讚美歌」(“Hymns in a Man’s Life”)の中で次のように述べている。

The moon, perhaps, has shrunken a little. One has been forced to learn about orbits, eclipses, relative distances, dead worlds, craters of the moon, and so on. The crescent at evening still startles the soul with its delicate flashing. But the mind works automatically and says: “Ah, she is in her first quarter. She is all there, in spite of the fact that we see only this slim blade. The earth’s shadow is over her.” And, willy-nilly, the intrusion of the mental processes dims the brilliance, the magic of the first apperception. (598)

このようにして「観念的な」知性や知識は、月を単なる物体に還元してしまい、月の「魅力的な輝き」を曇らせてしまうと言う。

またロレンスは『「チャタレー卿夫人の恋人」について』の中でも、同様のことを論じている。月は「死滅した噴火口に覆われて、表面が天然痘に冒された皮膚のように見える死んだ土の塊」に過ぎないものと見なされるようになってしまった(“A Propos” 511)。太陽に関しても同様のことが言える。太陽は「知識」によって、「黒点のある、球形のガスの塊」に過ぎないものになってしまったのだ。こうして太陽や月は、「知識」によって、説明可能な物体に過ぎなくなり、「抽象的な精神が巣くう、潤いのない皮相的な不毛の世界」と化し、神秘のヴェールを剥ぎ取られ「殺されてしまった」とロレンスは嘆く<sup>9</sup>。そこに想像力を働かせる余地はもはやないのである。

こうして人間は天地の万物に対する神秘感や畏敬の念を喪失し、それらとの一体感を失ってきたというわけである。更に続けてロレンスは、それをすべてのものに置き換えて、次のような興味深い説明を展開している。

It is the same with all things. The sheer delight of a child’s apperception is based on wonder; and deny it as we may, knowledge and wonder counteract one another. So that as knowledge increases wonder decreases. We say again: Familiarity breeds contempt. So that as we grow older, and become more familiar with phenomena, we become more contemptuous of them. (“Hymns in a Man’s Life” 598)

「知識が増加するにつれて驚異の念は減退する」とロレンスは言う。また、「慣れ過ぎは軽蔑を招く」、「慣れていくに従って、その事象を次第に侮るようになる」とはまさに言い得て妙であろう。

幼い頃、何も知らずに空を眺めて輝く月をじっと見つめ、満ち欠けを繰り返す月に驚異や神秘の

<sup>9</sup> 機械的な知性等に対する批判については他にも「民衆教育」(“Education of the People” 607, 618-19)を参照のこと。

念を抱き、また日本においては、そこにウサギが餅つきをしている姿を想像し、そのウサギとの会話を楽しんだ人が多いのではないだろうか。学校教育で月が地球を回る衛星であること、月の黒い部分がクレーターであるということを知識として学んだ後、その知識を得たことで月を眺めても興ざめしてしまった人はいないだろうか。

しかし、ロレンスは先の文章に続けて更に次のように述べている。

But that is only partly true. It has taken some races of men thousands of years to become contemptuous of the moon, and to the Hindu the cow is still wondrous. It is not familiarity that breeds contempt: it is the assumption of knowledge. (“Hymns in a Man’s Life” 598)

実は「軽蔑を招くのは慣れではない」と改めて言い直している。問題なのは「知識の思い上がり」(“the assumption of knowledge”)なのである。人間が地球や大地を表面的な知識のみで知り尽くしてしまったと思い込んだところで、それらは実際人間の表層的な知識だけでは極め尽くせない深さを持っていると「ニューメキシコ」(“New Mexico”)の中で述べている(141)。知ったかぶりの浅い知識、表層的な知識こそが問題だとロレンスは訴えているのである。

宇宙的大自然には人間がまだまだ解明できないことが多く秘められているにもかかわらず、ましてや科学者でもない一般人には宇宙の奥深さなど何も分かっていないにもかかわらず、人から得た知識をそのまま鵜呑みにし、その知識だけで対象すべてを解明したかのような奢った気持ちになってしまう、そのような人間の傲慢さが対象に対する侮りを生んでしまうという<sup>10</sup>。分析的、合理的知識自体は人類の素晴らしい研究成果であるが、その知識を持ちつつも奢ることなく、その知の限界を謙虚に受け入れることで、月に対する上記のような畏敬の念も失わないでいること、それこそが大事なのだろう。太陽に関しても同様である。

このようなロレンスの捉え方を人間同士の関係に置き換えてみよう。人間存在はそもそも生きているということ自体が驚異であり、それぞれの存在がユニークで神秘的であるにもかかわらず、表層的な関係性の中で、さぞかし相手のことをすべて知り尽くしたかのように思い込み、相手の存在をどういふものなのか、決めつけてしまったり、いたずらに相手を侮ってしまったりといったことを我々人間はやっていないだろうか。他者を知ろうにも、今日人間同士は表層的で分析的知識のみを得ることで満足してしまっていないだろうか。それだけでは本当の意味で相手のことを知ったことにはならず、人間同士の深く敬虔な絆を結べるはずはない、ましてやそのような関係では愛が育

---

<sup>10</sup> R・ドーキンスが虹をテーマに、虹を極めようとしている科学者たちの方が、まだまだ人間が立ち入れない虹の奥深さがあることを知っているために、対象を侮ることなく、畏敬の念を持ち続けることができると論じているが、同様のことが月に関しても言えるだろう。

めるはずがないというわけである。

次に「知る」方法の中でもロレンスが良しとしていた「一体化」によって知る方法について、詳しく考察を加えてみよう。「分離化」によって知る「知的、合理的、科学的方法」とは異なる、もう一つ別の知る方法、つまりそれは「宗教的、詩的な方法」であり、「天地の万物との一体化、肉体や性や感情や情熱との一体化、大地や太陽や星との一体化」によって知ることを意味していた。一体化によって知るとは、つまりは身体を使って、より具体的には五官を使って知るということに繋がっているのだ。ロレンスはその方法を重要視していたことは、以下の「なぜ小説は大切か」(“Why the Novel Matters”)からの引用に明らかである。

[...] as for knowing, if I find my finger in the fire, I know that fire burns, with a knowledge so emphatic and vital, it leaves Nirvana merely a conjecture. Oh, yes, my body, me alive, knows, and knows intensely. And as for the sum of all knowledge, it can't be anything more than an accumulation of all the things I know in the body, and you, dear reader, know in the body. (534)

火とはいかなるものなのかを知るのに、知的な知識を得て頭で知るよりも、身体を使って直観的に、つまり直接火に触れることで直観的、「宗教的、詩的」に感じ取る方が、より火の実体を知ることができるということである。肉体を通して知るとは、このように身体を使って五官を通して感じ取ることであり、それが「知的、合理的、科学的方法」を用いて得られた「すべての知識の総体」以上のものなのだと言説する。ロレンスはこのように、五感の中でもとりわけ最も「原始的な」触覚作用 (URL: 理化学研究所) である「触れ合い」を重視していたことをここで強調しておこう。

一方で、視覚に対してはどちらかという否定的である。視覚、つまり「見る」という行為と絡めて、何かを理解するのに目で見える表層的なものだけに頼っているのは、人間は本当の意味でその対象を理解することはできないとロレンスは主張する (“Art and Morality” 522 参照)。ボッティチェリのヴィーナスの前で「本能や直観」を恐れ、「必死にその絵を凝視する」が本来的な認識には至らない「哀れな」人々について、次のようにロレンスは「絵画集序論」 (“Introduction to These Paintings”) の中で論じている。

So those poor English and Americans in front of the Botticelli Venus. They stare so hard; they do so *want* to see. And their eyesight is perfect. But all they can see is a sort of nude woman on a sort of shell on a sort of pretty greenish water. [...] But real imaginative awareness, which is so largely physical, is denied them. [...]

[...] Their poor high-brow bodies stand there as dead as dust-bins, and can no more feel the sway of



complete imagery upon them than they can feel any other real sway. [...] The instincts and the intuitions are so nearly dead in them, and they fear even the feeble remains. (557)

肉体を軽視し、視覚や知性偏重になってしまった人々、想像力を働かせることなく視覚に頼り表面的な理解だけで納得してしまう人々に対してロレンスはこのように厳しく批判をするのだった。

以上、見てきた通り、ロレンスにとって他者理解——それは最終的には自己認識にも繋がるのだが——のためには、「知的、合理的、科学的方法」による知識よりも、「原始的な」感覚機能である触覚、つまり、身体的（肉体的）、直観的、想像的な結びつきを可能とする「触れ合い」を通して知ることの方がより重要であったことを確認しておこう<sup>11</sup>。

### II-3. 機械文明の問題

前節では知性や知識にこだわり、「知る」ということの本質的な意味を問い、そこからいわゆる知識の弊害の議論を始め、本当の意味で知るために重要なものが「触れ合い」であることを見てきた。前節の上記の議論を踏まえ、本節では機械文明に焦点を当て、愛の不毛性との関係を探っていくことにする。

#### II-3-i. 「触れ合い」を阻む機械

まず、機械と「触れ合い」の問題について考えてみよう。人間関係の構築、人間同士の理解のためには「触れ合い」が重要であるというロレンスの言葉に耳を傾けてきたが、現代社会において「触れ合い」による他者理解を阻害しているものとしてロレンスが批判の矛先を向けているものこそが機械（文明）であった。一体どういう関連があるのだろうか。まず「『チャタレー卿夫人の恋人』について」の中から、次の一節を取り上げてみよう。

The universe is dead for us, and how is it to come to life again? “Knowledge” has killed the sun, making it a ball of gas, with spots; “knowledge” has killed the moon, it is a dead little earth fretted with extinct craters as with smallpox; the machine has killed the earth for us, making it a surface, more or less bumpy, that you travel over. (“A Propos” 511)

---

<sup>11</sup> 生まれたての赤ん坊の視覚や聴覚の反応が始まるのが、生後数か月後からであるのに対し、触覚は五感の中でも発達が一番早く、「妊娠 10 週目のころから自分の身体や子宮壁に触れるという行動が見られ、学習が始まっている」と言う（URL: 仲谷）。また、五感を「活用するにあたっての優先順位」は高いものから挙げると「触覚」>「聴覚」>「視覚」>「臭覚」>「味覚」であり、「優先順位の高い感覚を活用しているときは、下位感覚を活用できない（活用しにくい）」と言う（URL:「科学ブログ」）。そういう意味でも重要な感覚である「触覚」が近年ないがしろにされつつある点については、仲谷氏をはじめとする現代の科学者たちも指摘していることを強調しておきたい。

「知識」が太陽や月を「殺してしまった」というくだりや表層的な知識の問題については既に論じた通りである。それに加えて、ここでは「機械」もまた大地を「表層化して殺してしまった」と論じている。ロレンスの言わんとしているのは、一体どういうことなのだろうか。機械は役に立つものであり、今日、我々は機械なしで生きていくのは困難だろう。列車や飛行機のない生活、携帯やスマホなしの生活はもはや考えられない。しかし、このように必要不可欠なものである機械について、ロレンスの言葉に沿って、素晴らしいと同時に、何か問題点を抱え持っているのではないかと疑ってみることも、今だからこそ必要なのではないか。

機械と人間関係の表層化の問題について考えるにあたり、まず旅の在り方についてのロレンスの考えに耳を傾けてみよう。以下は「ニューメキシコ」からの引用である。

Superficially, the world has become small and known. Poor little globe of earth, the tourists trot round you as easily as they trot round the Bois or round Central Park. There is no mystery left, we've been there, we've seen it, we know all about it. We've done the globe, and the globe is done.

This is quite true, superficially. On the superficies, horizontally, we've been everywhere and done everything we know all about it. Yet the more we know, superficially, the less we penetrate, vertically. It's all very well skimming across the surface of the ocean, and saying you know all about the sea. There still remain the terrifying under deeps, of which we have utterly no experience.

The same is true of land travel. We skim along, we get there, we see it all, we've done it all. And as a rule, we never once go through the curious film which railroads, ships, motor-cars, and hotels stretch over the surface of the whole earth. (141)

地球上の様々な土地（世界）には、簡単には経験できないような、その土地独特の奥深さがあるにもかかわらず、「世界は、表面的には小さくなり、既知のものとなってしまう」、神秘的ではなくなってしまうとロレンスは嘆いている。というのも旅行者は、地球上にくまなく存在する「鉄道や船舶、自動車、ホテル」といったまさに便利な機械文明の産物のおかげで、あらゆるところに行き、見物することができるようになったため、何でも知っていると思いついでいるからである。ところが、大洋にしろ陸地にしろ、表面を知り尽くしたつもりでいても、「恐ろしく底深い海下の世界」あるいはその土地独特の「地下に存する精」（“The Hopi Snake Dance” 82）、つまり「地霊」との接触は、そう簡単には体験できるものではないと言う。これは機械文明による便利さに<sup>あぐら</sup>胡坐をかき、表層的な旅経験しかできていないにもかかわらず、実質的な触れ合い経験ができていないと錯覚に陥っている現代の旅行者に対するロレンスの痛烈な風刺、批判である。

今の時代に置き換えて考えてみることにしよう。現代にあって人は、便利でお手軽なパックツアー

に参加し、飛行機も世界中を飛び交う中、以前にも増して地球上のあちらこちらを訪れることができるようになってきている。また、その場の有名な景色を背景に写真を撮るカメラやスマホで撮り、そこに行ったという証拠を残し、良い旅行だったと喜ぶ……。ロレンスが提起しているのは、それだけで果たして本当にその土地を味わったと言い切れるのかという問題である。もちろんその土地に行くこともなく、その場の情景をテレビやネットなどでヴァーチャルに見ることで、その土地のことを知った気になってしまうよりも、直接その場に行った方が、その地の空気を吸うことができているだけでも、はるかにその場を体験していると言えるだろう。しかし、果たしてそれだけで良いのかという問いかけである。

ロレンスが生きていた時代には今日ほど機械文明は発達していなかったが、それでも「旅の人」ロレンスは、本来の旅はどうあるべきなのかという意識を常に持ち、このような問いを我々に発信しているのである。機械文明の恩恵を受けられなかった時代は、世界中を巡ることはできなくても、移動できる範囲内であれば、その旅の道中、その土地の人々との交流も含め、時間をかけてじっくりと味わうことができたということなのだろう。美しい景色があれば、その場に立ち尽くし、目に焼き付け、身体で記憶したことだろう。あるいはそれを絵に描いて残すという作業を楽しむ人もいるかもしれない。ゆっくりと時間をかけて、その土地やその地に住む人々と直接的に触れ合う、このような昔の旅の在り方と、現在のように時間に余裕がない中で機械に頼る旅行の在り方と、どちらの方が本当の意味でその土地を経験し知ったことになるのだろうか。

また、このような問題提起をするにあたり、ロレンスが用いたユニークな比喩に焦点を当ててみよう。以下の引用の中でロレンスは地球を丸いボンボン菓子に、そしてその上を旅する旅人を蠅に喩えている。

Poor creatures that we are, we crave for experience, yet we are like flies that crawl on the pure and transparent mucous-paper in which the world like a bon-bon is wrapped so carefully that we can never get at it, though we see it there all the time as we move about it, apparently in contact, yet actually as far removed as if it were the moon.

[...] We are mistaken. The know-it-all state of mind is just the result of being outside the mucous-paper wrapping of civilization. Underneath is everything we don't know and are afraid of knowing. (141)

特に注目したいのは、「機械文明」を「ボンボン菓子を覆う透明のセロファン」に喩えている点である。旅行に関連する機械文明の産物としてロレンスが取り上げているのは「鉄道や船舶、自動車」といった交通手段が主であるが、現代社会であれば、飛行機はもちろんのこと、カメラやスマートフォンといった、旅行に必須の便利グッズをも表していると考えて良いだろう。これら機械文明の産物全

般をロレンスが「ボンボン菓子を覆う透明のセロファン」に喩えているわけであるが、蠅はボンボン菓子を舐めようにも、そのセロファンが邪魔になって菓子を全く味わうことができていないと言う。更に問題なのは、その透明なセロファン越しにボンボン菓子が外から見えているために、蠅は直接ボンボン菓자에触れていないにもかかわらず、まるで触れているかのような錯覚に陥り、それで満足してしまうという点であると論じている。その「何でも知っているという精神状況は、まさに、文明というセロファンの外皮に隔てられているがゆえに生じた結果なのだ」（“New Mexico” 141）ともロレンスは指摘する。現代の表層的な旅行の在り方を痛烈に風刺するにあたって、機械文明が人間と対象との間に立ち足かり、直接的な「触れ合い」を妨げているということを表すのに、ボンボン菓子と透明なセロファンの比喩は、まさに正鵠を射ていると言えるだろう<sup>12</sup>。

この比喩でロレンスは旅に関する話をしているわけだが、興味深いことにこの比喩表現は様々な連想を許し、他の事柄にも応用できる。例えば、この旅（旅行）の表層化の問題を人間関係に置き換えてみることにしよう。昔は互いの交流を図るには、直接相手のところに行って話をする、あるいは手紙を書く等の方法しかなかったが、現在は遠く離れていても電話でリアルに相手と話ができるようになり、更には近年、ラインをはじめとする様々な SNS 機能を利用して相手の様子を画面で見ながら会話をする等、多様な交流が可能となっている。便利な機器類。それらを利用できることはもちろん素晴らしいことである。以前であれば繋がらなかった人との交流が可能となり、小さなタブレットがあれば手軽に連絡がとれ、またそれを継続するのも容易であることから、実際に人間関係は広がっていると言えなくはないだろう。また、いつでもどこでも連絡を取り合うことができるために、一見、相互関係が深まっているように思える。確かに、もともと関係の深い者同士の交流手段としては便利で有効な手段だと考えられる。

しかし、実際に会って相手を目の前にして会話をするか否かで違いはないのだろうか。そのような機器を通じての交流手段だけで、果たして本当の意味での深い付き合いにまで発展させることができるのだろうか。便利だからといってすべて機械に頼り、それだけで人間関係が以前と同様に築けていると考えて良いのだろうか。それらは一見、人間関係を広げ、豊かにしているように思えるが、問題は生じていないだろうか。ここで一旦立ち止まり、それら機器類の問題について考えてみることにしよう。

先の引用の中でロレンスは、見たところ蠅はボンボン菓子と接触しているように見えながら、「本当のところは、月ほどに遠く離れて」おり、そのため、その土地の真髄を味わえてはいないと裁断

---

<sup>12</sup> 機械が人間にとって直接的な触れ合いを妨げている具体例として、例えば便利な自動販売機を考えてみよう。店が開いていなくとも 24 時間いつでも利用できる自動販売機のお陰で、喉が乾けばコインを入れるだけで飲みたいものがいつでも飲める。店員との会話も必要がない。今や「ごめんください」という言葉自体が死語になりつつあるようだ。一事が万事である。機械、機器類は便利ではあるものの、その存在ゆえに、人と人との触れ合いが多かれ少なかれ奪われてしまっているのも事実なのである。

していた。人間同士の関係についても同様のことが言えるのではないだろうか。それら電子機器類のおかげで、一見、関係が築けているように見えて、実はそうではない可能性、また相手の奥深い部分、その実体については「我々は何一つ知らないし知るのを怖がっている」(“New Mexico” 141) という可能性はないだろうか。そのために敢えて表面的な関係で済ませていないだろうか。ロレンスの言葉通りのことが、近年とりわけ携帯電話等の利用のために現実問題として起こっている。社会学者の土井隆義氏が『つながりを煽られる子どもたち』や『友達地獄』等々の中で指摘しているのは、まさにロレンスの主張に繋がる電子機器類による若者たちのコミュニケーションの問題なのである。

このように、現代社会においても、生活を豊かで高尚なものにしてくれ、居心地の良さを保証してくれる機械ではあるが、その存在ゆえに、人間は周囲との擬似「触れ合い」しか持てなくなり、生命体としての直接的で深みのある「触れ合い」を持たず、関係が表層的になったと言える。機械(装置や道具)は、「人間と万有との間にまるで死のように入り込んできた。古い時代にあった全一性や繋がりが切り裂かれてしまった」(“Pan in America” 29)のである。ロレンスのこのような問題提起は今の時代にあっても、いや、今だからこそ、真摯に受け止める必要があるのではないだろうか。

### II-3-ii. 人間の機械化 —— 生命体との違い (有機的か否か)

前項では、生命体である人間存在にとって機械は真の触れ合いを阻んでいるというロレンスの問題提起を取り上げ、機械文明にどっぷりつかり、機械の利便性を大いに享受している我々現代人にとっても考えるべき重要な問題であることを指摘した。ここでもう一点、取り上げておきたいのは、生命力の横溢<sup>おうえい</sup>を重視するロレンスにとって、機械は反生命的であり、それが人間の機械化を促している点を無視できなかつたという点である。ロレンスは機械を自然界の生命体と一線を画した存在とみなし、機械と生命体の違いを「機械的(無機的) (“mechanical”) と「有機的 (“organic”) という言葉で表現していた。以下はロレンスの一篇の詩「落ち葉」 (“Fallen Leaves”) からの引用である。

There is the organic connection, like leaves that belong to a tree  
and there is the mechanical connection, like leaves that are cast upon the earth. (*The Complete Poems of D.H.Lawrence* 615、以下 CP と略す)

人間等の生命体は「木に生い茂る葉っぱ同士」のような「有機的関係」を築けるのに対し、機械のような存在は「地面に落ちた葉っぱ同士」のように何らの関係性も築けず、それをロレンスは「機械的關係」と呼んでいる。「有機的」という言葉の意味からも分かるように、両者の違いは構成要

素がお互いに関連し依存し合うか否か、つまり、生命あるものとの関係性の中で常に他の存在と影響を与え合いつつ生成変化を繰り返すか否かの違いであると考えられる。

もう少し分かりやすくするために、人間の身体と機械を比較してみよう。人間の身体はそれぞれの臓器の寄せ集めであり、それら臓器は循環する血液によってすべて結びつけられ、統一体としてうまく機能している。一方、機械はどうだろうか。機械も個々のバラバラの部品の寄せ集めでできしており、その部品一つひとつが、機械本体のあるべき場所に位置し、電流を流すことでそれぞれの部品が繋がり、機械全体が作動するという意味では生命体と同じであるとも考えることも可能かもしれない。すなわち人間がバラバラの臓器の寄せ集めで成り立ち、血流で身体全体を動かしているのと同じなのではないかと。しかし、そこには大きな違いが存在するのである。

機械の部品は基本的にすべて独立した存在であり、電流を流してもそれぞれの部品同士が影響を与え合い変化することはない。ある部品に問題が生じて、その悪影響が他の部品に及ぶことはなく、その部品のみを交換すれば機械は元通りになる。それに対し生命体は、例えば人間の場合を考えてみても、身体を維持するのに必要な栄養素が血管を通じて各臓器に運ばれ、それによって各臓器が生成を繰り返し、身体の部分同士がそれぞれ緊密に連携をとり、身体全体の生命を維持することに貢献しているのだ。また、臓器の一つに問題が発生した場合、その影響は血流に乗って他の臓器にまで及ぶことが多々あるのである。

以上見てきた通り、人間の身体はロレンスが論じるように、機械のような単なる「様々な部分の集合体ではない」のである（“Healing” 620）。ロレンスが機械は「他のすべての自然物との生きた関係」を持っていない（“Aristocracy” 481 参照）と言うように、自然界の生物と一線を画すものと捉えるのも故なしというわけではないのだ。人間と機械のこのような違いをロレンスは「有機的」という言葉にこだわり、有機的か否かの違いであると表現するのだった。生成過程の中ですべてが繋がり、影響を与え合い、成長や変化を繰り返すということこそが生命体である証なのである。

視野を広げ大自然へと目を向けてみよう。上記のことは自然界全体についても当てはまるだろう。生命圏である大自然の或る場所に異常な状態が生じると、それは確実に周囲にまで影響を及ぼすことになる。まさに自然環境破壊の問題にも繋がっているのである。以上見てきたことから、人間は大自然の中で息する他の生き物すべてと同様、お互いが有機的に繋がり、影響を与え合う存在であると言える。

ロレンスが問題にしているのは、本来、有機的な生命体である人間存在が、機械と共にあることで機械化していき、本来の生命体としての在り方を喪失しかかっているということなのだ。「アメリカのパン神」（“Pan in America”）の中でロレンスは次のように論じている。

What can a man do with his life but live it? And what does life consist in, save a vivid relatedness

between the man and the living universe that surrounds him? Yet man insulates himself more and more into mechanism, and repudiates everything but the machine and the contrivance of which he himself is master, god in the machine. (*Phoenix* 27)

人間は本来、生きた大自然との生き生きとした絆、関係性の中に身を置くことによって「生きている」のだが、機械がそこに割り込んできたために、機械や装置のみに囲まれた生活の中で機械主義にのめり込んでいくと言う。ロレンスが懸念するのは、本来有機的である存在が、お互いに繋がりを失った無機的で機械的な存在になってしまうということなのだ。この問題は人間関係の在り方にも通じるだろう。人間が機械化し、相互に絆や繋がりを持たないような状況で、果たして愛し合うことができるのだろうか。それで生きていると言えるのだろうか。

機械技術の発展がまだまだ途上段階であった当時であって、ロレンスは既にこのような問題提起をしていた。もっともロレンスが機械自体を否定していたわけではない点は指摘しておく必要があるだろう。「トマス・ハーディ研究」(“Study of Thomas Hardy”)の中で、彼は中世の手工業の時代に戻るべきだという考えを「ばかげている」(426)と否定し、引き続き、機械に求めるべきことは何なのかを明確にし、そのようになっていない現実を批判する。

I can ask it [the machine] for perfect accommodating utensils or articles of use, and I shall get them.

Wherefore I do honour to the machine and to its inventor. It will produce what we want, and save us the necessity of much labour. Which is what it was invented for.

But to what pitiable misuse is it put! Do we use the machine to produce goods for our need, or is it used as a muck-rake for raking together leaps of money? Why, when man, in his godly effort, has produced a means to freedom, do we make it a means to more slavery? (426-27)

問題は、人間が機械を支配しているつもりが、それによって「奴隷状態」になってしまうということ、つまり、機械の使い方が間違っているのだとロレンスは考えていたのである。しかし、一旦機械に隷属してしまうと、なかなかそこから抜け出せなくなるというのが実情であろう。

今日、社会を見渡すと彼の言葉が予言めいて響いてこないだろうか。機械はますます人間社会に入ってきており、様々な装置だけでなく AI (人工知能) の発達によって、アイボのように人間の友だちになることを目的としたロボットも開発され、更には、今、世界中で注目を集めている人型ロボットも存在するようになった。それが、香港を拠点とするハンソン・ロボティクス社 (Hanson Robotics) の人型ロボット「ソフィア」である。まさに人間の姿をし、表情も豊かなこのロボットが、サウジアラビアの市民権を獲得したというニュースが流れたのは 2017 年 10 月 29 日のことだっ

た。人間と機械の共存の在り方については熱い議論がなされており、賛否両論あるが、物理学者のスティーヴン・ホーキング博士の「AIが人類を滅ぼすかもしれない」という警告（URL:「NHK クローズアップ現代」）は、傾聴に値するだろう。そうならないためにも、今後、人間はロボットとどのように向き合うべきなのか、人間と機械の違いは何なのか等々、考えなくてはならない問題も多く出てくることだろう。その際にロレンスの貴重な言葉に今一度耳を傾ける意義はあるだろう。

以上、現代において人は愛し合えないという悲劇の原因を、ロレンスの言葉に沿って、拝金主義（物質主義）、知性偏重主義、そして機械文明（機械主義）の3点に絞って探ってきた。物質主義や拝金主義による競争社会の助長、合理的な「知識」偏重主義による対象への畏敬の念の喪失、機械文明の発達による生命力や「潜勢力」の枯渇と抽象化、直接的な「触れ合い」の機会を奪われた人間の無機能的なロボット化等々、問題は深刻である。生命の抽象化を余儀なくされ、関係性に耐えられず、孤独を余儀なくされ、愛し合うことが困難になりつつある現代人に、絆回復への希望の道は残されているのだろうか。

### III. 未来に託す希望

ロレンスは以上見てきた通り、個人の愛の不毛性の問題を警告として最晩年に発したが、悲観論を展開するだけでは終わらなかった。春になると大地の木々や植物が生命力を回復するように、ロレンスは常に希望を失わない。人類の未来に希望を繋ぐための最後の頼みの綱として、ロレンスは改めて「触れ合い」を強調することになる。彼が最後に提案したのは、機械・産業文明ならぬ、「触れ合いの文明」（“the civilisation of touch”）の構築だった。それを今こそ実現すべきだとロレンスは「未来の闘い」（“Future War”）という詩の中で高らかに謳う。大自然の生命との「触れ合い」、あるいは人間同士の「触れ合い」を基盤に据えた文明の構築を。

After our industrial civilisation has broken, and the civilisation of touch has begun  
war will cease, there will be no more wars.

The heart of man, in so far as it is budding, is budding warless  
and budding towards infinite variety, variegation  
and where there is infinite variety, there is no interest in war.

Oneness makes war, and the obsession of oneness. (CP 612)<sup>13</sup>

---

<sup>13</sup> “variety”、あるいは“variegation”といった言葉の使用、また、“oneness”にこだわることで戦争を生み出すといった表現など、ロレンスの発想は現代社会における“diversity”の先駆けであると言えそうである。



### III-1. 「触れ合いの文明」の構築に必要なこと

#### III-1-i. 内なる生命力の回復

「触れ合いの文明」を築き、現代人の悲劇的状况——愛の不毛性——から脱出するために、我々はどうすれば良いのだろうか。この問題を考えるにあたり、今一度『チャタレー』に立ち戻ってみよう。物語の中でロレンスが未来への希望を託したコニーとメラーズであるが、まずはコニーに焦点を当ててみる。夫であるクリフォードをはじめとする不毛な異性関係に失望した彼女は、避難所を求めて何度も森に出かけるようになるが、それはいかなる意味を持っているのか。また、その効果は果たしてあったのだろうか。

ロレンスは『チャタレー』を書いていた当時、「絆」に関心を持っていたが、一概に「絆」といっても男女間の絆だけに腐心していたわけではなかった。以下の引用に見られるように、彼が「三重の絆」を考えていたことに注目しよう。

But relationship is threefold. First, there is the relation to the living universe. Then comes the relation of man to woman. Then comes the relation of man to man. And each is a blood-relationship, not mere spirit of mind. (“A Propos” 512, see also “Morality and the Novel” 527)<sup>14</sup>

当時ロレンスはこのように「生きている天地の万物との絆」を筆頭に挙げていたことが分かる。しかも、芸術としての小説の役割に関して、『チャタレー』の初稿執筆前に書かれた「道徳と小説」(“Morality and the Novel”)において、「芸術の役目は人間と彼を取り巻く宇宙的大自然との関係を明らかにすることである」(527)と述べている点を想起するのも無駄ではないだろう。

男性との不毛な関係に疲れ果てて心身がバラバラになっていたコニーは周囲との絆を失い、「切り離され」、「断片と化している」状況で不安を抱いていた (*Chatterley* 20, see also 50)。生命体であるにもかかわらず、周囲との関係を喪失してしまった彼女にまず必要なのは、再び「天地の万物の内に根を下ろし」、宇宙的大自然との生き生きとした絆を取り戻し、生命力を回復することだとロレンスは言う (“A Propos” 323、330)。

内部の空虚さが強調されるという点ではクリフォードと同じだったコニーであるが、ここで両者の違いが出てくる。彼女が取った行動は、時間があれば森に出かけ、そこで森と触れ合いつつ時を過ごすというものだった。最初は森にいてもすべては空しく、触感も実体感もない一種の麻痺状態が続いていたものの、頻繁に森を訪れるにつれてコニーは徐々に変化を遂げていく。生命力溢れる

---

<sup>14</sup> ここに女性同士の関係を盛り込んでいないことから、ロレンスは時代的な限界を抱えていたと評することも可能かもしれない。しかし、少なくとも『虹』をはじめとする作品の中で、ロレンスが女性同士の関係も扱っている点を指摘しておくことは無駄ではないだろう。

木々の沈黙に惹かれ始めた彼女の肉体そのものが森に感応し始め、森との生命力の相互交流を実現させていくのだった。そして、木々をはじめとする、森の様々な「躍動する生命」(165)に触れ、相互交感を成し遂げたコニーは、森を自分の外部の客体としてしか捉えられなかった状態から、次第に自分の内部に取り込んでいき、彼女自身が森のような存在になっていく。

*She was like a forest, like the dark interlacing of the oakwood, humming inaudibly with myriad unfolding buds. Meanwhile the birds of desire were asleep in the vast interlaced intricacy of her body.*  
(138)

個々の人間同士が絆や繋がりを持つことが容易ではない今日、絆を回復するためには、まずは人間一人ひとりが、人間に比べれば未だ「侵されて」いない大自然と触れ合い、生きている天地の万物との絆を回復する必要があるということだろう。実際、大地と直に触れ合うことにより、少しずつ彼女の生命力は回復していくのだった。それは安田喜憲氏が論じる、「自然のふところに帰り、疲れた魂を癒し、大地の生命力を再び身につけて蘇る」(187)過程であり、「人間の命は大地から、自然から与えられたものなのであり、人間はその大地と自然を無視しては生きられない」ことを『チャタレー』は伝えていると言えるだろう。このようにして生命体としての内なる生命力を回復させたコニーは、次の段階として森番メラーズとの関係に救いを求めていくことになる。

### III-1-ii. “tenderness”の勇氣

次に、メラーズに焦点を当ててみよう。ロレンス文学を論じるにあたって大事なキーワードは「触れ合い」(“touch”)以外にも数多くあるが、『チャタレー』における重要なキーワードとしては他に“tenderness”が挙げられるだろう。物語の中で人を愛するのに必要なものとしてロレンスがどうしても表現したかった重要なテーマであり<sup>15</sup>、彼が人類の未来に希望を託すメラーズ、コニーの救世主として登場させたメラーズの「存在の核心」(277)を言い表すのに用いた言葉である。このキーワードが出てくる場面を以下に引用してみよう。メラーズとコニーの会話の中で、彼がまず自分の「存在の核心」について次のようにコニーに答えている。

*“I [Mellors] tell you, it’s invisible. I don’t believe in the world, nor in money, nor in advancement, nor in the future of our civilization.—If there’s got to be a future for humanity, there’ll have to be a very*

<sup>15</sup> ロレンスの妻のフリーダが『チャタレー』の『初稿』の「序文」で、「tenderness と思いやりとが、そこ[『初稿』]では十分な迫力と力強さをもって表現されていないし、どうも少し物足りない」というロレンスの言葉を回想している(増口 5 参照)。

big change from what now is.” (277)

多くの人々が肯定的に捉える「金銭」、「進歩」、「文明の未来」といったものに対して否を唱えるメラーズであり、彼は「目には見えないもの」、世の中が価値を置かないものこそが人類の未来に貢献することになるのであり、また自分の「存在の核心」なのだと言語するのだった。そして、彼のその「存在の核心」が具体的に何なのかをコニーが的確に表現するくだりを次に引用してみよう。

“Shall I tell you?” she said, looking into his face. “Shall I tell you what you have that other men don’t have, and that will make the future? Shall I tell you?”

“Tell me then,” he replied.

“It’s the courage of your own tenderness, that’s what it is: like when you put your hand on my tail and say I’ve got a pretty tail.” (277)

「目には見えないもの」で大事なものといえば様々あるだろうが、コニーは「“tenderness”の勇氣」こそが「他の人が持っていないで、未来をつくるもの」、メラーズだけが持っているものだと主張している。その「“tenderness”の勇氣」について更に踏み込んで考察を加えよう<sup>16</sup>。

まず“tenderness”の訳語であるが、「優しさ」が一般的だろう。では更に踏み込んで、その“tenderness”という語が暗示する「優しさ」とは一体どのような優しさなのかを考えてみよう。物語中には同じく「優しさ」と訳されることの多い“kindness”という語が用いられている箇所もあることから(121 参照)<sup>17</sup>、この場面で敢えてコニーに“tenderness”の方を選ばせているからには、ロレンスは“kindness”とは別の独特のニュアンスを伝えたかった可能性が高い。ここで『英英辞典』を紐解くと、“tenderness”は“compassion”「共感力」<sup>18</sup>とも言い換えが可能であることが分かる。つまり、“tenderness”の意味する「優しさ」とは、相手に寄り添い、想像力を駆使することで相手の状況を理解し共感することから生まれる優しさであると考えられる。

更にコニーの言葉に注目すると、彼女は「優しさ」だけでなく、「優しさの勇氣」という表現も使っ

---

<sup>16</sup> メラーズが蛇に譬えられている(206)点を想起すると、彼の優しさはロレンスが「ホピ族の蛇踊り」(“The Hopi Snake Dance”)の中で論じる蛇の「優しさ」(76, 87 参照)と同質のものであると推察できるだろう。その蛇こそは、生命の源泉である「大地」の核に存在する「暗黒の太陽」神の「秘儀の知のメッセンジャー」(Gilbert 173)なのである。本稿では焦点を当てられなかったが、ロレンス文学を鑑賞するにあたり、蛇の象徴、表象、イメージに目を向けることの重要性は言うまでもない(このテーマは筆者の研究人生における中心課題であった)。「蛇」は注23で触れているロレンスの「大地的想像力」の源でもあった。

<sup>17</sup> ロレンスは表層的な優しさを表わす場合に、次のように敢えて“kindness”、“kind”という言葉を用いている。“Now men are all separate little entities. While “kindness” is the glib order of the day—everybody must be “kind”—underneath this “kindness” we find a coldness of heart, a lack of heart, a callousness, that is very dreary. Every man is a menace to every other man. (“A Propos” 332)

ているが、相手に優しさを示すのに、なぜ勇気が必要なのだろうか。先に取り上げた蠅とボンボン菓子<sup>18</sup>の比喩の中でロレンスは、「文明というセロファン」の下部には「すべてが存在」しているが、それを知ることが我々は「恐れている」と論じていた。見えない深みの部分に一体何が潜んでいるのか、それを知る勇気がなくては対象の内部には入っていけないのである。同様のことが人間関係についても言えるだろう。神秘的で不可思議な要素を多々具えている生命体である他者との相互理解と生命力溢れる人間関係を打ち立てるためには、表面的なものにこだわらず、恐れることなく相手の深みにまで侵入していき、相手に寄り添い、触れ合う勇気、つまりは、セロファンを突き破り対象の深みにまで入っていき、相手を知ろうとする勇気が必要なのだ。知りたくない真実も見えてくる可能性があるだろう。しかし、それをも受け入れてこそ、本当の意味で相手を「知る」ということになるのではないか。

メラーズと対照的な存在として登場するコニーの夫クリフォードが、「常に自分のことしか考えていない」(290) 人間として描かれているのも故なしというわけではないのである。相手に対して「自己満足的な優しさ」(253) は示せても、「本当の優しさ」(238) を示せないクリフォード、彼に欠けていたのは、まさにこのような「tenderness」の勇気<sup>19</sup>だったのである。

### III-1-iii. 想像力の駆使

次に、「触れ合いの文明」を構築するのに今一つ重要なものとして「想像力」を取り上げたい。ただ触れ合うだけでは相手のことを真の意味で理解できるとは限らない。相手を本当の意味で理解するためには「想像力」が必要なのである。相手が今、何を考えているのか、どういう状況なのか等々、想像力をたくましくして相手に寄り添い、理解しようと努力することではじめて相手のことを理解することが可能となるのだ。そういう意味で、ロレンスが大事だと訴えている「触れ合い」とは、直接的に対象に触れることはもちろん、対象の本質や心に触れるといった、精神的な「触れ合い」や寄り添いをも包摂する大きな枠組みの言葉である点をここで確認しておこう。

<sup>18</sup> *The Concise Oxford Dictionary of Current English* を参照のこと。因に、物語のコニーとメラーズの逢瀬の場面で、これら二つの語が次の引用に見られるように同時に用いられていることを指摘しておこう。“Oh, you love me! You love me!” she said, in a little cry like one of her blind, inarticulate love-cries. And he went into her softly, feeling the stream of tenderness flowing in release from his bowels to hers, the bowels of compassion kindled between them. (Chatterley 279, italics mine) 他にも、『ロングマン現代英英辞典』(電子辞書 CACIO EX-word) では“sympathetic treatment and a lot of attention”、また『オックスフォード米語辞典』(電子辞書 CACIO EX-word) では“showing gentleness and concern or sympathy”といったように、いずれも“sympathetic”という「共感」を意味する語で説明がなされていることも付記しておく。

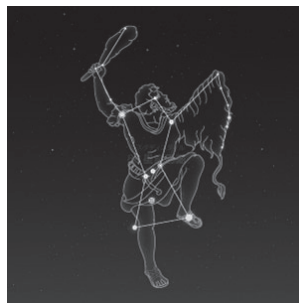
<sup>19</sup> コニーが不毛な関係しか築けなかったクリフォードやマイクリスの内部は「虚ろ」、「空虚」、「無」と描写されることが多いが、このような描写もやはり、「深みの想像力」の欠如にかかわっているとと言えるだろう。つまり内部に空洞を抱えている彼らは、その深みに「知ることが恐ろしいような何か」を蓄えることもなく、また他者の深みにそのような神秘的なものが存在するということを感じ取る想像力も欠けている。彼らは自然に対しても人間に対しても、触れ合うことができない存在の象徴なのである(“A Propos” 333 参照)。メラーズが闘う相手は、こういった「世界中の金(銭)と機械と、生気を失った観念的な猿」たちだとロレンスは言う(Chatterley 279)。

このように重要な「想像力」であるが、現代に生きる我々にとって想像力を働かせること自体が困難になりつつある。例えば、図1は南の空を夜、眺めた時の星空だが、この図から何が見えてくるだろうか。特に○をつけた部分に注目しよう。その部分を見て、そこにオリオンという人物を想像力で生み出すことはできるだろうか。鼓型の星座ということで、学校でならった知識をもとに、「オリオン座」がすぐに脳裏に浮かんだ人はいることだろう。しかし、それは単に外部から得た「知識」を記憶していたというだけの話なのである。



(図1)

太古の人々は図1の○のマークがついていない満点の星々を日々眺めながら、鼓型をした星々のまとまりに人物の姿を思い描いたのだろう。ギリシア神話のオリオンの物語とこの一連の星々とを関連づけ、図2のようなオリオンという人物の姿を思い描き、それをオリオン座と命名した人々が現に存在したのだ。その事実を考えただけでも、当時の人々の想像力のたくましさには脱帽である。



(図2)

花沢成一氏も解説している通り、想像力を働かせるには過去の様々な経験が「基盤」になっている<sup>20</sup>ということをもとに考えると、現代人は一つには身体を用いての多様な経験が貧困になっているのかもしれない。また一つには、星空を眺めながら想像力を駆使して、そこにオリオンをイメージし、物語をつむぐといった作業をするには現代人は忙しすぎるのかもしれない。あるいは、鼓型の星の集団をオリオン座と呼ぶ、といったような既存の知識や情報があるため、それらが邪魔をして、壮大な星空を見ても今更新たに想像力を働かせようなどという気持ちにはならないということもあるかもしれない。いずれにせよ現代において豊かな想像力を働かせる機会が著しく減っているのは確かだろう。

同時に、「想像力」をないがしろにしがちな現代社会の傾向に目を向けることも必要だろう。内田伸子氏は想像力の問題を教育文化と関連付けて次のように説明している。

心理学においては、物を認識する基礎としての「知覚」や記憶痕跡の「想起」、問題解決における「推理」の過程などは重要な研究テーマとして、それぞれ一領域を形成するような重要

<sup>20</sup> 花沢氏によると、想像とは「現実的な心像ではないといっても、過去の経験とまったく無縁であるというわけではなく、むしろこれを基盤としている。したがって個人における想像の内容は、その人の経験そのもの、あるいは経験から得られた心像の質や量に規定される。しかも想像は、過去の経験の写しかえではなく、それを解体し再構成して、新しい心像をつくりだすものである」という (URL)。

な研究テーマであり続けている。しかし、想像力はこれまで実証的な研究対象としてとりあげられたことはほとんどなく、せいぜい、ヴィゴツキーが『子どもの想像力と創造』と題した著作の中で想像力をめぐっての論考を展開しているにすぎない。このように、想像力が真正面からとりあげられなかったこと理由は、多分に生産効率重視の西欧合理主義的な社会的価値観、それに影響を受けた学校文化と無関係ではないように思われる。

抽象的な思考力や記憶力、注意力はとりわけ学校文化の中で重要視されてきた。しかし、想像力についてはどうか。想像力はこれまで、二次的なものとしてしか扱われない傾向があった。問題を的確に解くことができ、たくさんのことを要領よく記憶でき、教師のことばに耳を傾けられる子どもの学力の偏差値が高くなり、受験に有利であるという現状がある限り、こうした傾向は驚くにはあたらない。(30-1)

このように「生産効率重視の西欧合理主義的な社会的価値、それに影響を受けた学校文化」、あるいは今日の受験制度の中で、人々は「想像力」を「二次的なもの」として扱う傾向にあると言う<sup>21</sup>。しかし、だからこそ今、「想像力」の重要性を改めて見直し、その必要性について訴えていく必要があるのではないだろうか。

以上、見てきた通り、現代はまさに想像力貧困の時代と言っても良いだろう。このような状況にある人間を「哀れな虫けら同然」と呼び、それでは「真に生きたことにはならない」と言う以下のロレンスの言葉は、我々の心に重く響いてくる。

And if we deny our imagination, and have no imaginative life, we are poor worms who have never lived.  
("Introduction to These Paintings" 559)

「生きる」とはどういうことなのかを真剣に追究したロレンスならではの言葉であろう。

以上、人間同士の絆を取り戻して「触れ合いの文明」を構築するためにどうすべきなのかをロレンスの言葉を紐解きつつ探ってきた。大自然との触れ合いによる生命力の回復、そして想像力を駆使することで「優しさの勇氣」を発揮する必要があると言う。対象に対する畏敬の念を抱き、勇氣をもって対象を受け入れ、理解し、対象との絆をしっかりと築くことが大事なのである。にもかかわらず、現代社会にあって、生命力の回復を目指そうにも自然破壊が著しく、「優しさの勇氣」を発揮しようにも、それに必要な「触れ合い」が擬似「触れ合い」、あるいは表層的な「触れ合い」になってしまっており、同時に、相手の奥深い部分を理解するため、相手に寄り添うために必要な「想

<sup>21</sup> 他にも、R.L.Brett は想像力を「墮落によってひきおこされ」るものだとする否定的な見方が過去には存在していたことを指摘している (4)。

像力」も貧困化の道を辿りつつあると言う。ロレンスのこのような問題意識は、現在社会にもまさに相通じるところがあると言えるだろう。

### III-2. 悲観的時代観に潜む楽観主義 ——「太陽」と共に始めよ！

『チャタレー』という物語が悲劇的な状況にある人間存在にとって、大自然との一体化により生命力を回復し、更には“tenderness”という想像力溢れる触れ合いを通じて個人同士の愛を育む可能性を探った作品でもあることを見てきた。物語の結末は、森を追い出されたメラーズがカナダからコニーに宛てた手紙の文面で終わっており、今は離れ離れになっているものの、いつか二人が一緒に暮らせる日が来ることをほのめかしてくれてはいる。しかし、クリフォードとの離婚がスムーズにはいきそうになく、何よりもロレンス自身が二人と一緒に住ませるという結末にしなかったことから、彼の未来予想図が決して明るいだけのものではないことが察せられる。

それでもロレンスがロレンスらしいのは、どれほど悲劇的な状況であっても決して諦めない点である。まるで大地が過酷な冬の厳寒の最中であって、ただひたすらじつくりと春を待ち詫びるように、そして春になれば枯れてしまったように見える木々が新芽を一齐に吹き出すように、生命圏の諸々の生命<sup>いのち</sup>の再生、復活を信じ続けた文学者だった。そこで本稿の最後に、悲観的な状況の中にも未来に希望を繋げようとするロレンスのメッセージを取り上げることにしよう。

豊かな想像力をもって「触れ合いの文明」を築くことが一朝一夕には実現できないとするなら、我々はどうすれば良いのだろうか。まずロレンスは大自然との繋がり回復の可能性を、森を頻繁に訪れるというコニーの行動に託した。その可能性を追求することは尊い行為だろう。しかしながら、人間が回帰すべきその大自然も今や機械・産業文明のために人工の手が入ることで浸食され、危機的な状況になりつつあるのが現実である。ではいかなる道が残されているのだろうか。「個人は愛し合えない」と唱えた随筆『アポカリプス』の結末で、ロレンスはこう訴えかけている。

What we want is to destroy our false, inorganic connections, especially those related to money, and re-establish the living organic connections, with the cosmos, the sun and earth, with mankind and nation and family. Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen. (149)

まずは「我々に義理立てして消滅したりはしない太陽」(Apocalypse 148)のもとに出て行き、「太陽と共に始めよ、そうすれば、後のことは徐々に生起してくるだろう」と言う。人工の手が及び得ない太陽に最後の希望を託す言葉になっている。

太陽のもとにいると不思議と力が湧いてくる経験は誰しもあるのではないだろうか。そこで原点に立ち戻り、我々人間が本来いかなる存在なのかを今一度感じ取り、大切なことは何なのかを考え

る……そして希望ある未来を構築するために新たな一步を踏み出すことができれば、有機的な触れ合いに満ちた世の中を、「触れ合いの文明」を再び実現することができるだろうと未来に希望を託すロレンスだった。様々なもの同士の有機的な結合、絆を求め続けたロレンスが最後に発したメッセージ——「太陽と共に始めよ」——は傾聴に値するだろう<sup>22</sup>。

## 最後に

以上、現代の日本社会にも十分通じるロレンスの警告と未来への希望を紐解いてきた。「現代人は愛し合えない」という強烈なメッセージを投げかけ、その原因を「金銭、物質」、「知性、知識」、「機械」といった、現代社会において重要視されているものに探ったロレンス。時代を常にはすかいに構えて見るロレンスは、ある意味「へそ曲がり」とみなされても仕方がないくらいの徹底ぶりである。しかし、彼の主張には一理あるのではないだろうか。時代の流れに沿って何の疑問も抱かず、多くの人々が良いものと思い込んでいるものに対して、ロレンスは真摯に向き合い、その「絶対」を鵜呑みにすることなく、絶対神話の裏に潜む問題点を暴き出している。「絶対」を疑う、そういったスタンスを取って取ることで、人が見落としがちな点、重要な盲点が明確に意識化されることにもなるのである。

問題は、ロレンスの発信を現実の重要な警告として我々が認識するか否か、太陽のもとで、自分自身を振り返り、周囲を見回し、「深みの想像力」、「繋がり想像力」<sup>23</sup>を用いて、人間関係を築く努力をするか否か。ロレンスの言葉に耳を傾け、過去と現在を読み取り、更には想像力をたくましくしてロレンスと共に人間関係の未来を思い描くことができるかどうか、それこそが今、我々に問われている。

<sup>22</sup> 『チャタレー』の中でメラーズは太陽に、コニーは森に喩えられているが、不毛状態に陥っていたコニーがメラーズによって温められ、再び生命力溢れる存在に生まれ変わるという設定になっていることから、ロレンスの太陽に託す思いが読み取れるだろう。

<sup>23</sup> G・バシュラールが人間の想像力を地水火風それぞれの特徴を備えた想像力に分類しており、ロレンスの想像力をとりわけ「大地」と関連づけて論じている。そのような「大地的想像力」は、人々を「地下的な生の探求」へと導くものであり、その想像力の特徴の一つは、物質の「内部を見たい」という「内方志向」(『大地と休息の夢想』20-1)にあると言う。ここで論じている「深みの想像力」あるいは「繋がり想像力」という言葉は筆者が拙論(『チャタレー卿夫人の恋人』における「大地的想像力」——「深み」の荒廃とその回復のイメージ)他)で用いた用語であるが、これらはまさにバシュラールの言う「大地の物質の想像力」(『大地と意志の夢想』13)と関連している。



## 引用文献

- Brett, R.L. 『空想と想像力 *Fancy and Imagination*』. 文学批評ゼミナール 6. 児玉実英訳. 研究社, 1971.
- Gilbert, Sandra. *Acts of Attention*. Ithaca and London: Cornell UP, 1972.
- Lawrence, D.H. *Apocalypse and the Writings on Revelation*. Ed. Mara Kalnins. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- . “A Propos of ‘Lady Chatterley’s Lover.’” *Lady Chatterley’s Lover*. Ed. Michael Squires. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . “Aristocracy.” *Phoenix II*. Ed. Warren Roberts and Harry T. Moore. Harmondsworth: Penguin Books, 1978.
- . “Art and Morality.” *Phoenix*. Ed. Edward McDonald. New York: The Viking P, 1974.
- . “Do Women Change?” *Phoenix II*.
- . “Education of the People.” *Phoenix*.
- . “Fallen Leaves,” *The Complete Poems of D.H.Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto & Warren Roberts. Harmondsworth: Penguin Books, 1980.
- . “Future War.” *CP*.
- . “Healing.” *CP*.
- . “The Hopi Snake Dance.” *Mornings in Mexico and Etruscan Places*. Harmondsworth: Penguin Books, 1975.
- . “Hymns in a Man’s Life,” *Phoenix II*.
- . “Introduction to These Paintings.” *Phoenix*.
- . *Lady Chatterley’s Lover*. Ed. Michael Squires. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . *The Letters of D.H.Lawrence*. vol. II 1913-16. Ed. George J. Zytaruk & James T. Bolton. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- . “Morality and the Novel.” *Phoenix*.
- . “New Mexico.” *Phoenix*.
- . “Pan in America.” *Phoenix*.
- . “Study of Thomas Hardy.” *Phoenix*.
- . “Why the Novel Matters.” *Phoenix*.
- 内田 伸子. 『想像力 —— 創造の泉をさぐる』. 講談社現代新書. 講談社, 1994.
- 香山 リカ. 『比べずにはいられない症候群』. すばる社, 2014.
- 田部井 世志子. 「『チャタレー卿夫人の恋人』における「大地的想像力」——「深み」の荒廃とその回復のイメージ」.  
『ロレンス研究 —— 「チャタレー卿夫人の恋人」』. 朝日出版社, 1998.
- 土井 隆義. 『つながりを煽られる子どもたち』. 岩波ブックレット No.903. 岩波書店, 2014.
- . 『友だち地獄』. ちくま新書, 2012.
- ドーキンス, リチャード. 『虹の解体』. 福岡伸一訳. 早川書房, 2001.

バシュラール, G. 『大地と意志の夢想』. 及川馥訳. 思潮社, 1972.

---. 『大地と休息の夢想』. 饗庭孝男訳. 思潮社, 1970.

増口 充訳. 『初稿 D・H・ロレンス — チャタレー卿夫人の恋人』. 彩流社, 2005.

安田 喜憲. 『蛇と十字架 — 東西の風土と宗教』. 人文書院, 1997.

*The Concise Oxford Dictionary of Current English*. The Fifth Edition. Oxford: Oxford UP, 1970.

『オックスフォード米語辞典』(電子辞書 CACIO EX-word)

『ロングマン現代英英辞典』(電子辞書 CACIO EX-word)

URL:

NHK クローズアップ現代+ 「車いすの天才ホーキング博士の遺言」

(<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4258/index.html>, 2021 年 9 月 24 日)

「科学プログ — 生物史から、自然の摂理を読み解く」

(<http://www.seibutsushi.net/blog/2018/12/4287.html>, 2018 年 12 月 6 日、2021 年 9 月 21 日)

仲谷 正史. 「わたしたちは触覚のことを忘れてる!? — 「触れる」を楽しく科学する」

(<https://www.toshin.com/sekai/interview/16/>, 2021 年 9 月 21 日)

花沢 成一. 『日本大百科全書』(ニッポニカ)の解説.

(<https://kotobank.jp/word/%E6%83%B3%E5%83%8F-89522>, 2021 年 9 月 24 日)

理化学研究所, 新潟医療福祉大学. 「皮膚で触覚が生まれる仕組みの一端を解明 — 表皮幹細胞が感覚神経をコント

ロールしている」([https://www.riken.jp/press/2018/20181128\\_1/](https://www.riken.jp/press/2018/20181128_1/), 2018 年 11 月 28 日)

図 1

「オリオン座」の検索結果 - Yahoo! 検索 (画像)

[https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&fr=wsr\\_is&p=%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%AA%E3%83%B3%E5%BA%A7#ce796162f7f17b00f29380923e6b6bad](https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&fr=wsr_is&p=%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%AA%E3%83%B3%E5%BA%A7#ce796162f7f17b00f29380923e6b6bad), 2022 年 2 月 14 日)

図 2

「オリオン座」の検索結果 - Yahoo! 検索 (画像)

([https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&fr=wsr\\_is&p=%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%AA%E3%83%B3%E5%BA%A7#cdc79afabce9b80116394c9ab44a5cb2](https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&fr=wsr_is&p=%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%AA%E3%83%B3%E5%BA%A7#cdc79afabce9b80116394c9ab44a5cb2), 2021 年 12 月 28 日)

## 謝 辞

33年間の長きに亘り、本学文学部で教鞭を執り研究をする環境を与えていただき、またこのような形で記念号を出版していただくことになり、まず、心からお礼を申し上げます。思い起こせば、実に多様な学生たちとの出会いを通じて、また教職協働作業の中で多くの教職員の皆さんと共に活動をする中で、かけがえのない貴重な経験をさせていただきました。皆さんとの思い出を胸に秘めつつ、第2ならぬ第3の人生へとこれから新たな一步を踏み出します。改めてお礼を申し上げます。

私にとってロレンスもまたこれまでの人生において、かけがえのない朋友ともいべき存在です。本稿では紙面の都合上、ロレンスの重要なメッセージのほんの一部しか取り上げることができませんでした。普段、意識しない重要な問題を気付かせてくれる、これこそがロレンス文学の醍醐味だと考えています。「へそ曲がり」なロレンスの捉え方に興味・関心を持っていただけた場合は、これをきっかけにロレンスの物語やエッセイ等を読んでいただければ幸いです。

